

令和6年度 伊那市立伊那西小学校評価表

学校関係者評価；(A：十分達成された B：ほぼ達成された C：不十分であった) 自己(項目間相対を加味した到達度)評価 (a：十分達成された b：ほぼ達成された c：不十分であった)

学校教育目標	重点目標(中長期的目標)
「かしこさ」「やさしさ」「たくましさ」～知・徳・体の調和のとれた人間形成～	「林間ほぼくらの教室だ」「根っこを肥やすふるさと教育の創造」 伊那西の豊かな自然と文化、人材を最大限に活用した『自然教育』『ふるさと教育』を柱にして、地域に開かれた学校を目指し、体験を通して『豊かな知性と確かな学力』『豊かな人間性』『たくましい心と体』のバランスのよい子どもを育てる
	今年度の重点目標
	(1) 子どもと教職員が共に学ぶ：不易と流行、バランスをもって人として学び続ける姿を
	(2) 全職員が児童を共通理解で：小規模特認校としての特長をふまえた個別最適な指導を研究
	(3) 林間で学ぶ伊那西小学校：今しかない時期に、ここでしかできない経験と学びを

総合評価		
成果と課題	評価	改善策・向上策
○伊那市の教育理念「はじめに子どもありき」を原点とし、「林間を活用した教育活動」「一人一人を大切にされた教育活動」「地域と連携した教育活動」の3本の柱で教育活動を実践した。林間の活動では、各学年が取り組む活動に加え、全校縦割り班により「私たちの林間づくり」に年間通して取り組んだ。県林業センターや林務課、地域で木材に関わる仕事をしている専門家を招き、子どもたちが行う作業に意味づけをすることで、マラソンコース整備などの活動に課題をもって主体的に取り組むことができた。また、今年度も危険木として伐採を行わなければならない場面があり、切り倒した木を有効活用して使い続けていくことを全校で学んだ。森の循環に関わる内容にも踏み込むことができた。さらに今年度は伊那中学校区保小中連携公開授業で、林間にある物を題材に活動する中から子どもたちが「問いをもち」、自ら追究していく理科学習について参観者に提案することができた。今後も林間を中心的な題材に据えながら、子どもたちが本物に触れて考える学びを大切にしていきたい。		
○保護者を対象にした「学校評価アンケート」では、「地域に開かれた学校となっており、行きやすく話しやすいと思いますか」「学校職員は、保護者の相談や問い合わせに丁寧に応じていますか」の項目の評価が高かった。保護者の気持ちに寄り添いながら保護者の思いを丁寧に聞くこと、学校での子どもたちの姿を積極的に伝えていくことを教職員一丸となって取り組んできたことの成果だと思われる。		
(1) これからの時代に生きる子どもたちを育てる学校であるために、教師自身が今まで持っていた教師観・子ども観・授業観のままでは対応できないことを校長が職員会議で何度も職員に向けて話をした。特に「探究」「ICT機器の効果的な活用」の大切さについて、職員の意識が変わってきていることが大きな成果である。夏休みに行われたICT研修にICTを苦手とする職員が積極的に参加し、得意な職員から教えてもらう姿が見られた。自分から新しいことを学び、授業に生かそうとする職員集団に成長している。 自然、地質、登山、哲学、ものづくりなど職員自身が自分の学びたいことを生き生きと学ぶWell-beingの実現を目指して今後も取り組んでいく。	A b	○教師自身が今までの経験から得た教師観・子ども観・授業観を大切にしながら、それだけではこれからの時代に生きる子どもたちを育てる学校にはならないことを理解し、意識改革に努め、さらに研修を重ねたい。 ○教師自身が生き生きと学び続けることができるために、時間外勤務の縮減は喫緊の課題であるので、子どもたちに必要な学びと伊那西小ならではの学びを大切につつ、学校・保護者・教職員の負担を考慮しながら日程や職員の行事や日常活動を見直して計画する。
(2) 小規模特認校となり7年目を迎えた本校は、不登校傾向、発達障害等、きめ細やかな支援を必要とする児童が大変多い現状である。一人の子どもも取り残されない「多様性を包み込む」学校づくりに向け、担任一人で抱えるのではなく全職員で児童を共通理解し、支援の方向を考えることができた(毎週行う学年会全体会・月1度行う支援委員会)。 教師主導の一斉授業から、子どもの「問い」を大切にされた授業、その子のペースで学習できる授業、体験を通して学びを深める授業、ICTの効果的な活用など、職員一人一人が授業改善に取り組んだ。	A a	○小規模特認校として、多様な困難・悩みを抱える児童・保護者が今後も増えていくことが予想される。学校は、一人一人に寄り添い、丁寧に話を聴く。すべての児童が自分らしく学ぶことのできる学びのあり方を研修・研究し、多様性を包み込む学校づくりをさらに推進したい。 ○多様な学びの場として、中間教室、民間施設との連携も積極的に図っていく。
(3) 林間での学習における3本柱「全校児童で取り組む私たちの林間づくり」「学年ごとに取り組む太陽の時間・生活科」「日々の授業で林間を活用した教科学習」を全職員が共通認識しながら子どもたちと学びを深めた。全校縦割り班で行う年2回の「マラソンコース整備活動」、3年前から継続している「アカマツの保護活動」、ネイチャーゲーム・飯ごう炊さんをしながら林間の素晴らしさを感じる「林間と親しむ日」など、どれも体験を通して伊那西小学校でしかできない豊かな学びを深めることができた。また、築4年を経過した森の教室を全校で清掃し学びの環境に感謝の気持ちをもった。 シイタケ栽培の原木となるコナラの伐倒では、全校皆でロープを引き、簡単には倒れない1本の木の命の重みを全校で感じ合った。学年での取り組みとしては、1・2年生のヤマボウシ自然学校を講師とした森の生態の学習、3年生の林間で見られるチョウの調査やミヤマシジミの保護活動、4年生の林間の食材を生かした料理・林間アスレチックの制作・5年生の緑の少年団活動・6年生の林間を生かした児童会活動などを行った。	A a	○本校は、学校林が日本一近くにある小学校である。必要に応じて、教室の中での学びから、教室を飛び出し、林間で学ぶ伊那西小学校でありたい。そのために、まず教師自身が林間の魅力を感じたい。そして子どもたちの願い、問いから授業や活動を構想したい。 ○本年度もたくさん地域講師にお世話になりながら学びを深めた。来年度も積極的に地域講師を活用していく。

領域	対象	評価項目	評価の観点
教育活動	教育課程	○一人一人を生かす授業の創造	○児童・学級・学校・地域の持ち味を生かした特色ある教育活動を展開できたか
	学習指導	○思考力・表現力・判断力の育成 ・主体的・対話的で深い学びを目指した授業研究 ・ICT機器の効果的な活用	○1時間の授業を「ねらい」「めりはり」「みとどけ」を意識して授業を行っているか ○児童の「問い」を大切にされた授業づくりを行ったか ○グループ・ペア学習を位置づけ、子ども同士の対話を深める中で「主体的・対話的で深い学び」を目指した指導ができたか ○ICT機器を効果的に使用することができたか
		○基礎的・基本的な学力をつける ・iPadを活用したドリル学習	○日課の「チャレンジタイム」にドリルを位置づけ、iPadを活用できたか
	生徒指導	○心のふれあいを深める生徒指導	○児童一人一人が存在感・所属感をもてる学級の組織づくり・人間関係づくりを図ることができたか ○特に心を寄せる必要がある児童について、全職員の共通理解のもと一貫性のある指導ができたか ○児童理解に係る報告・連絡/相談を実行しているか

成果と課題	評価	改善策・向上策
○総合的な学習の時間や生活科では、林間・地域素材を教材化して、子どもたちの願いの実現に取り組む、子どもたちの内に成就感や自己肯定感を大きく育むことができた。	A a	○教職員は、児童の内に確かに育っている力を注意深く見取りたい。
○教師が学級の児童を思い浮かべながら地道に教材研究をし、「ねらい」を明確にした1時間の授業構想を立て授業に臨むことができた。子ども自身が「問い」をもち、自分及び仲間と共に考え合いながら課題を解決する授業に学校全体が少しずつ変わってきたことが大切な成果である。	A b	○教師主導の授業から、児童の「問い」を大切にされた探究的な学びに大きく舵を切りたい。まずは教師の意識改革。 ○来年度、研究部会として「授業改善部会」を設置する。「個別最適な学び」「協働的な学び」「探究的な学び」について実際の授業づくりを通して研究したい。
○日課に基礎的な計算力や書く力の定着をねらいとした「チャレンジタイム」を組み込み、学年ごとにドリル等の繰り返し学習と指導を充実させている。AIドリル「スマイルネクスト」を利用し、児童が自分のペースでドリル学習に取り組むこともできた。	A a	○ICT機器を日常の道具として使用することを定着させ、個別最適な学習に繋げていく。
○学級づくりの基盤となる児童理解の視点を確保にするためのQ-U研修が定着してきている。結果について職員全体で分析し、学級経営に生かすよう心がけた。今後も児童理解に努めたい。 ○特に配慮を要する児童については、毎週の学年会や月1回の支援委員会で情報を共有したり、適切な支援を検討したりする中で共通理解に努めた。 ○不登校傾向の児童について、無理に登校刺激は行わないものの、担任が家庭訪問を続けたり、中間教室や民間施設、医療機関とも連携をとったりしながら、その子のため	A a	○Q-Uや発達障害に関わる研修を引き続き行い、学級経営における人間関係づくりの実践につなげられるよう力量を高めていく。また、場合に応じてチームで関わる体制を作り取り組んでいく。 ○小規模特認校として、不登校傾向や発達障害等、配慮が必要な児童が大変多くなってきている。教職員は、児童一人一人に温かく寄り添いたい。また学校だけで抱えるのではなく、中間教室、子ども相談室、民間施設、医療等と積極的に連携をとっていく。

				の支援を全職員で考え、対応することができた。		
		○開かれた学級経営の充実と深化	○子ども一人一人を受け入れ、子どもとの信頼関係を築くことができたか ○いじめの防止・早期発見に取り組み、子ども同士の温かい人間関係をつくることに努めたか	○子どもの足りないところを指摘するのではなく、その子自身のよさから出発する児童理解へと学校全体が進んでいることが大きな成果である。 ○毎学期友だちとの関係を確認するアンケートを実施したり、月ごと児童の様子を記入するカードを用いたりして、いじめの早期発見とその防止に取り組んできた。スクールカウンセラーと全校児童がショートカウンセリングを実施することで、担任の気づかない児童の思いを知ることができた。	B b	○「児童と向き合う時間」を計画的に設けて、児童と話をしたり寄り添ったりと、関わる機会を増やすなどしながら児童理解を深め、児童の些細な変化を見逃さないように取り組んでいく。 ○教師の人権感覚を磨く研修や、いじめ防止に関わる研修を実施していく。 ○児童がスクールカウンセラーのショートカウンセリングを受ける機会を設けたことで、自分の心の中にある感情を出せ、心理的安定に繋がった。
学 校 運 営	安全	○校内、校外、通学路に関わる安全確保	○災害、不審者、交通事故、野生動物に係る危険から、児童の安全を確保する取り組みは十分であったか。	○熊の出没状況について、PTA・区長・信大教授と随時連絡を取りながら児童の安全を第一に対応することができた。 ○信州大学瀧井暁子先生を講師とする「熊の学習会」を実施した。瀧井先生と熊の出没状況について連絡を取り合い、ご助言をもとに熊バスの運行等決めることができた。 ○火事や地震発生時に関わる避難訓練を実施し、その対応と身の守り方について学習できた。スクールサポーターを講師として防犯訓練も行い、不審者への対応を学ぶことができた。 ○春に交通安全教室を実施し、歩行練習及び自転車練習について訓練したり支援センターの方の話を聞いたりするなかで安全に対する意識を高めることができた。	A a	○今後も地域、保護者、各関係機関等との連携を密にして、子どもの安全を守っていく。特に本校特有の危機管理である「熊への対応」については、児童の安全を第一に保護者の理解を深めながら進めていく。 ○児童登校班への指導を綿密に行い、通学路の安全点検を保護者と協力して実施していく。 ○来年度は「安心の家」への挨拶を児童と共にやる予定である。
		○管理責任場所の日常的な整頓及び異常の有無の確認	○定期的に危険箇所の点検がなされ、安全への配慮が十分であったか。 ○教師自ら校舎内外の環境を整え、子どもと共に整備活動を実践したか。	○管理分担場所について安全点検を毎月初めに定期的に行い、異常箇所については早期に修繕するよう心がけた。 ○校舎内外の分担箇所の整理整頓に心がけ、必要に応じて職員作業等を行い環境を整えた。	B b	○校舎内外の環境整備を心がけ、必要に応じて職員作業などで不要物の処理等を行う。 ○点検日以外も危険を伴うことについては職員間での「報告・連絡・相談」そして「確認」を徹底し、常に学校を安全な場とする。
	地域との連携	○信頼を深めともに歩む家庭・地域との連携	○各領域に地域の方々を招聘し、豊かな経験や磨かれた技術を学習に生かし、教育効果を上げることができたか。 ○学校林に関わって、地域の方々と連携を図りながら、「学びの森」づくりに向かうことができたか。	○コロナ禍を経て、地域の方々にご来校いただく機会が減ったが、本年度は学校行事、各学年の取り組み等で地域の方を講師に招いて学ぶことで子どもたちの学びがより深い物となった。 ○読み聞かせの会、バラボランティアの皆様とは、特に深い交流ができた。 ○地域ボランティアの方々のお力をお借りし、今年も学校の環境整備を行った。林間の奥や斜面の草刈りも行っていたことで、林間での子どもたちの活動がさらに広がった。	B b	○地域に開かれた学校、地域と共に歩む学校として、地域の方々との連携を今後も大切にしていく。 ○「学びの森づくり」に向けてさらに地域との連携を図りたい。
	研修	○教師としての資質向上を目指した研修・研鑽	○授業公開や学年会の時間を有効に使い、互いに学び合ったり、知恵を出し合ったり、工夫し合ったりして指導に生かすことができたか。 ○自己課題をもち、専門的な教養や技術を身につけるよう心がけたか ○非違行為防止に努め、研修を行ったか。	○11月29日に伊那中学校区保小中公開授業を行い、長野県内各地から25名ほどの参観者が来校した。「子どもが問いや願いをもち、主体的に追究する授業」を目標に、3年理科 単元名「風やゴムの力」の授業を公開した。林間の「マイツリー」を使って各自が自分のパチンコを作り、ドングリを飛ばして遊ぶ活動の中から問いが生まれ、それを解決するための実験方法を友と対話しながら吟味し、意欲的に実験して確かめていく姿が見られた。 ○子どもたちが大好きな林間を材料にどんな学びができそうか課題をもち、長野県林業総合センター小山泰弘先生を講師として年間2回お招きし、林間を実際に探索しながら動植物や環境等について教えていただいた。 ○非違行為防止・危機管理について、職員会議ごとに校長から職員に指導を行い、研修を深めた。特に飲酒運転撲滅に関しては、資料を元に職員が小グループで考え合い、絶対に起こしてはならないことと全職員で誓い合った。	A b	○学習指導研究会、学年会を中心に、互いに学び合える職員集団づくりに努める。 ○非違行為防止研修を引き続き行い、職員一人一人がしっかりと意識して児童が安心して学ぶことができる環境を作っていく。